カフカ：≪アメリカ≫試論

——ロマーン論への総序——

(Ⅲ)

河　中　正　彦

(Ⅳ)　宿命小説として

a）『アメリカ』における＜罰＞の構造

我々は『アメリカ』の本質を，＜現代小説＞，＜社会小説＞，＜宿命小説＞の三つのアスペクトで把えるという前提で出発した。そしてこのシリーズの(Ⅰ)の前半で，カフカがアメリカに現代の最も尖端的な諸相（テクノロジー，巨大な組織，事象の高い速度）を読みとって1912年当時の現代アメリカよりさらに現代的なアメリカ像を作品に定着させたことを確認した。(Ⅰ)の後半では，この世界で異邦人としてしか生きられない作家カフカにとって，『アメリカ』と『城』に共通な設定である「異邦にはいっていく」というモチーフがいかにぬきさしならぬ必然であったかが，様々な角度から分析された。つまり(Ⅰ)の前半と後半は，＜現代小説＞と＜社会小説＞との要素に相当している。

(Ⅱ)では，未完に終った『アメリカ』の結尾について，カフカが融和的解決と悲劇的解決の両方をほのめかす相反するふたつの言及を残していることから生ずる解釈上の困難をとりあげた。これまでの研究史の発展のディアレクティクをあとづけて追構成しながら，『アメリカ』が＜社会小説＞と＜宿命小説＞のあざない合わされた構成をとっているという観点から，自分なりの解答を提示してみた。

そして漸くこの(Ⅲ)で，第三のアスペクトである＜宿命小説＞としての要素について語りうる段階にまでこぎつけた。ここでは『アメリカ』と『審判』と『城』の「アマーリア挿話」をむすぶ太い線が主要な問題となるであろう。

本稿は，日本独文学会・秋季研究発表会（1979年10月8日於九州大学）で口頭発表した草稿に手を加えたものである。なお本稿の(Ⅰ)は山口大学「独仏文学」第2号（1980）に，(Ⅱ)は山口大学「文学会志」第三十一巻（1980）に発表された。

『アメリカ』から『審判』への展開には，連続と飛躍の両方の要素がある。『審判』から『城』の「アマーリア挿話」への発展にも地つづきと切断の両要素がある。これら相互間の関係を浮きぼりにし，同一性と差違性を明瞭にするためには，まず『アメリカ』において主人公カールの受ける罰の構造についていくらか立ち入った分析をしておく必要があると考える。

a－1）父による追放

すでに幾度かふれたように，『アメリカ』の主人公カールは，父，伯父，ホテル・オクシデンタルによって，三度の追放をうける。最初の追放は，カールがヨハンナ・ブルンマーという35才位の自分の家の女中に誘惑され，彼女に子供ができたというので，両親によってプラハからアメリカへ遣られるのである。留学などというシャレたものではなく，体のいい追放でさえない。両親は，スキャンダルがわが身に及ぶのを避けるためか，生まれた子の養育費を払うのを免れるためかさだかでないが[1]，ほとんど裸一貫も同然のカールを，文字どうりアメリカへ追放するのだ。どんな保証も縁故も手づるもないままに，である。結果的には，彼の伯父が（富豪で上院議員をつとめている）ニューヨーク港へカールを迎えにきてくれてはいるが，伯父に事態を知らせたのは，意外なことに両親ではなく，誘惑した女中なのである。両親の冷酷さはここにも，またカールの旅装にも歴然としている。カールの持ちものといえば，傘とトランクひとつ，トランクの中身は，下着・シャツ・上着の着替え，両親の写真一葉，いくらかの金と，はなむけのヴェロナ産のサラミ・ソーセージという奇妙なとりあわせである。もし運よく伯父にめぐり会えなかったら，こんな状態でアメリカに追放される結果は，「ニューヨーク港の路地ですぐさまくたばる」[2] 以外にはなかったはずだ。

アメリカ送り――この言葉が18～9世紀のヨーロッパ人にとってどんなおそろしい響きをもっていたかを現在再現するのはもうむつかしくなっている。それは多分帝政末期のロシア人にとって，シベリア送りという言葉がもっていたニュアンスと同じであった。アメリカは当時，ヨーロッパの流刑地だったのである。疑う人はアベ・プレヴォーものする『マノン・レスコー』（1731）をこころみに一読なさるがいい。浮気で浪費癖のあるマノンは，恋人グリュー騎士をうらぎって，一万フランで老好色漢G.M.に一夜の伽を約束する。それを知ったグリューはマノンの所へ急行し，彼女を翻意させ，金はそっくりいただいて二人で姿をくらます。怒った老人は二人を逮捕させる。グリューは父の尽力で自由の身になるが，マノンは売春婦や浮浪人といっしょにアメリカ送りとな

る。グリューは自由の身でありながら，マノンについてアメリカへ渡る。ニュー・オーリンズに彼らが到着すると，市民が総出ででむかえてくれる。「しかし進むにつれて驚いたのは，その人たちが立派な町だといって誇っていたものが，みすぼらしい掘立小屋の集りでしかなかったということだった。それらの小屋に住んでいる者は全部で五・六百人だった。」[3]私はこのアベ・プレヴォーの記述にどれ位の実証性があるかをつまびらかにしないが，アメリカ植民史のある段階でこのような情景がみられたであろうことは想像にかたくない。ひと前に顔だしのしにくくなった人間たちの吹きだまりとして，アメリカは第一歩をふみだしたのだろう。そうでもなければ誰がすき好んで文明のヨーロッパを捨て，危険で不便なアメリカへ渡ったろうか。

もちろんカフカがこの作品を書いた20世紀の初葉は，プレヴォーの18世紀初葉とはちがう。しかし1896年にプラハに生まれた詩人ヨハネス・ウルツィディールは，次のように証言している。

≪『火夫』（註 ― 『アメリカ』の第一章）の主人公であり，またカフカが彼のためにハッピー・エンドを構想したので中断されねばならなかった長篇『失踪者』（註 ― 『アメリカ』の原題）の主人公でもあるカール・ロスマンは，わたしが物理学の教授に「以前なら君のような人間はアメリカへ送られたものだ」と教壇から奴鳴りつけられたのとちょうど同じ時代に属している。≫[4]

してみるとカフカが『アメリカ』を構想していた時点でも，アメリカ送りという言葉のもつ暗いニュアンスはまだ失われてはいなかったのだ。カールは単に装備や条件の劣悪さによってだけではなく，時代の通念からいっても，アメリカへ流刑されたのだといって過言ではない。

それにしてもカールに加えられる罰はその罪に比べて法外に重いのではなかろうか？カールの伯父のいうように，カールの罪は，「単にその罪名を挙げさえすれば，すでにそのなかに赦免（ゆるし）が含まれている」[5]ようなたぐいのものである。カールは別に女中によって愉楽を味わわせてもらった訳でもない。それなら罰されても，まだ慰めがあっただろう。しかし彼が女中と一体になったとき感じたのは，逆に「恐ろしい進退きわまったという感じ」[6]なのだし，女中に「また会ってね」と何度もいわれたあとで自分のベッドに泣きながら(!)帰ってゆくのである。ここに16才の少年のうぶな感性をよみとるのは誤りではない。だがそれ以上に注意せねばならないのは，カールの性的態度を全くの受動性に終始させ，その上彼に性的快楽をいささかも味わせていない作家カフカの意図

である。こうなればこそカールの受ける罰は，なおさら割にあわぬ不当な扱いに思えてくるのだ。

ここに多分『アメリカ』のもっとも大きな秘密のひとつがある。罪とは呼べない微罪に対して，途轍もない罰がくだる ― これこそカールに加えられる三度の罰に共通するパターンである。そればかりではない。もし比喩的に一の罪に対して九の罰が下るのを『アメリカ』の世界だとしてみよう。これを竿頭一歩すすめて，零の罪に対して十の罰が下る世界を想定すれば，それが次の長篇『審判』にほかならない。

ヨーゼフ・K.は，「何も悪いことをしないのに」[7]ある朝突然逮補されるのだ。ここに『アメリカ』と『審判』をつなぐ太い導線がある。その差は，よく見ればほんの一歩であり，このわずか一歩が，前者をリアリズム風に，後者をシュールリアリズム風に見せている当のものなのである。本来ならここで一挙に『アメリカ』と『審判』を貫く宿命小説としての要素の分析に突入して行きたい所だが，そこをこらえて伯父とホテル・オクシデンタルによる追放について一渡り眼を走らせておこう。

a－2）伯父による追放

伯父の拒絶はまったく唐突にやってくる。読者はひどい不意うちをくらう。どうも様子が変だと思いながら急坂を滑降していたスキーヤーが，空中に舞いあがってから，その急坂がジャンプ用のシャンツェだったことに気づいたときの驚愕 ―― こういえばグリーン氏を通じてカールに渡された伯父の義絶状の与える衝撃をいくぶんなりとも伝えることができようか？あとになってから読者は，「そういえばなんとなく変だったな」と気づく。カフカは，破局の予感をかすかに漂わせながら，しかも事件が読者の意表をついて唐突な展開をみせるように，という難しい両面操作を絶妙のバランスでやりとげている。

ニュー・ヨーク港で運よく伯父にめぐりあえたカールは，彼の手で厚く保護されながらアメリカ生活の第一歩をふみ出す。伯父はカールの要求を，どんなささやかなことでもかなえてくれる。しかし伯父は決して彼を甘やかす訳ではない。過保護でもない。伯父は，自分もかってはそうであった体験にてらして，アメリカに住みつく外国人にとって何が最も大切かをよく把握したうえでカールを教育している。カールはピアノや乗馬をならう。これらは一応のみだしなみというにすぎまい。ドイツ語しか話せないカールにとって最も重要な課題は，もちろん英語の習得である。伯父は彼に商業大学の若い教授を家庭教師として

つけてやり，朝の七時からレッスンが始まるのだ。しかし伯父がそれ以上に大切だと考えているものがある。主体的な判断力の涵養がそれである。

≪伯父はだれかある知りあいについて，ほんのちょっとした言葉さえ漏らさないのが常であった。カールが観察をつうじて不可欠なことや興味ぶかいことをみつけだすようにしておいたのである。≫[8)]

伯父は自分が一介の小運送屋からたたきあげたように，カールが独立で一本立ちすることを望んでいる。カールの人間評価や人間認識に余計な手を貸すまいという自己抑制が伯父の教育上の原則である。また教育環境をととのえるためならば，どんな物質的な犠牲もおしまない，というのも伯父の原則なのである。要するに至れり尽せりなのだが，危機を脱した，というより危機に頬をなでられはしたが一度もその底でもがいたことのないカールには，そのありがたさが本当には腹にこたえていない。

≪すべてにわたって慎重な伯父はカールに当分のあいだ下らないことにまじめに取りくまないように忠告した。「おまえはすべてをよく見て吟味せねばならんだろうが，心を奪われてはいけないよ。アメリカに来たヨーロッパ人の最初の生活は，誕生にもたとえられる。もっとも，無用な心配をしないように言い添えておくと，あの世からこの世に生まれてくるよりも，ずっとはやく慣れはするがね。しかしいつも心せねばならぬことは，最初の判断は例外なくおぼつかないということ，そうして最初の判断で，ここでの生活を続けてゆく助けとなるそれ以後の判断が乱されてはいけないということなんだ。私じしん，たとえば立派な原則にのっとって身を処するかわりに，何日もバルコニーに立って，迷った羊のように通りをみおろしている到着早々の人たちを幾人も知っている。こんなことをすればひとの心はかならず掻きみだされるものだ。活動の盛んなニューヨークの一日にみとれて我を忘れる，こんな孤独な無為は観光客には許されもしようし，場合によっては勧められもしようが，しかし永住するつもりのものには身の破滅なのだ。これは誇張したいい方だが，この場合には遠慮なくこの言葉を使っていいのだ。」…≫[9)]

これは，バルコニーからみおろせるニューヨークの多彩な光景にうっとりしているカールを説諭する伯父の言葉だが，彼の考えが集中的によく現われてい

る。要するに，この世界の現象的な多様性に眼を奪われてはならない。認識の表面的な広さは，決して認識の確実さも深さも保証することはない。むしろ自己限定こそ判断力の確立には不可欠であり，自己原則の確立と判断力のそれとは等しく比例するものだ。カールが伯父の企業を見学したがるのに，彼がそれを渋り，電信室しかみせないのも，この考えに基ずいている。

多分この伯父は，こんなことはどこにも書いてないのだが，カトリックではなく，プロテスタントではあるまいか？彼は資本主義的な営利活動を，即ち地上での蓄財を倫理的に悪だとは考えていない。しかしそれは彼が禁欲的であり，自分の蓄財を快楽のために蕩尽しない，という条件の下でのみそうなのである。マックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』をわざわざ引用するまでもなく，これはプロテスタントの典型的な思考形態を示している。カフカは恐らく愛読した『フランクリン自伝』からこのような人間像を手にいれたのであろう。フランクリンは熱烈なプロテスタントであった。

≪この名もないわが一家は早くから宗教改革の運動に加わり，メリー女王の治世中にも，カトリック教に反抗するというので，時に罰せられる危険があったにもかかわらず，新教徒で通して来た。≫[10)]

さらに『自伝』には次のような箇所がある。

≪相当の才能のある人物ならば最初によい計画をたてて，自分の注意を脇にそらすような娯楽や他の事業などには一切眼もくれず，その計画の遂行を唯一の研究とも仕事ともする限り、かならずや人類に偉大な変化を与え，大事業を成就することができると私はつねづね考えているのだから。≫[11)]

カールの伯父はさすがにこれほど直接的で泥くさくはないが，発想はそれほど違っているともおもえないのだ。アメリカ資本主義の原始蓄積期におあつらえむきなイデオロギーであるフランクリンの思想は，なお脈々と伯父の血にも流れている。後にカールへの義絶状で自らいうように，彼は「原則の人」なのである。一定のプリンシプルで常に自己を律することに生存の現実感を汲んでいる原則的人間である。こうして彼はわずか三十年で一介の小運送屋から，アメリカ有数の大資本家で上院議員もつとめる男にのしあがったのだ。こういう人間は寛容でもあり，他人に言いたいことを腹の中におさめておくこともできるが，いったん他人が自分の原則を踏みにじったとなると回復不可能なほどの拒絶をつきつけることもありうるのだ。この伯父にとってカールは，少し上っ

調子な，いい気な少年にみえたにちがいない。破局は意外に早く訪れた。

発端は伯父がカールの英会話の実地教育として，自分の商会の取引先の二人の紳士との会食にカールを臨席させたことから始まる。銀行家のポランダー氏は，ニューヨーク郊外の自宅へカールを招待しようとする。しかし伯父はカールの乗馬や英会話の日課を楯にとって許さない。だが他方おとくい先の銀行家の申し出をそう無下にことわるわけにもいかないので，伯父の態度は歯切れの悪いあいまいなものとなる。カールはそこにつけ入って強引に伯父の許可をとりつけてしまう。翌朝の英語の時間にはまにあうように帰っているという条件で，カールは出発する。しかしその直後伯父は義絶状をしたためて，その日の真夜中にカールに渡すようにとグリーン氏に託していたのだった。

≪愛する甥よ。残念ながらあまりにも短かった私たちの共同生活のあいだにきっとおまえも悟ったことと思うが，私は徹頭徹尾原則の男なのだ。これは私の身辺の人たちだけでなく，私じしんにも不快で悲しいことだが，しかし現在の私があるのはすべて，これらの原則のおかげなのだよ。私はだれにも，愛する甥よ，たとえおまえにさえも，私をこの地上から否定し去ることは許さない。（中略）おまえは私の意志にそむいて今晩私のもとを去る決心をした，それなら一生その決意に固執するがいい，それでこそ男の決心というものだ。（後略）≫[12)]

伯父にしてみれば，彼を彼たらしめているものが彼の原則なのであるから，その原則を否定されることは，彼の存在そのものを否定されるに等しい。しかし考えてみれば，伯父の逆鱗にふれたカールの振舞いは，たかだかほんの一度伯父の意向にそむいただけではないか？伯父からみれば，意を尽してカールを一人前のアメリカ人に育ててやろうとする熱意を踏みにじられたと感じたにちがいない。だがカールを追放すれば，彼が「ニューヨーク港の路地ですぐさまくたばる」はずだということを一番よく知っているのも，当の伯父じしんなのだ。乗馬の練習も英会話の勉強も一日欠かしてどうなるというものでもなかろう。ここでも，罪とは呼べない微罪に対してくだる法外な罰，という図式は貫徹されている。たしかにカールに落度というものがないわけではない。しかし十六才の遊びたい盛りの少年が，ただ一度外出をせびったからといって，という想いをぬぐえないのは，あながち私だけではあるまい。

この節の終りにひと言いい添えておくと，カフカは伯父の義絶状がカールに与えたであろう内面の波紋について一語も筆を費やしていない。伯父の手紙が終った直後の地の文は，それを手渡したグリーン氏の「読み終えましたか？」という質問で始っている。ここには描写上の巨きな空白があるといわねばならない。この空白こそカフカが，文学上の師と仰いだフローベールから学んだものである。「私の考えでは，『感情教育』のなかでもっとも美しいものは文節ではなくて一つの空白である」[13]というプルーストのフローベール評は，そのままカフカにもあてはまる。奥行きのある描写では，語られた言葉は語り，かわりに，語られなかった余白が歌うのである。

a－3）ホテル・オクシデンタルからの追放

伯父に追放され行きどころのなくなったカールは，徒歩旅行を始め，ある小さな宿屋に泊る。ふところの淋しい彼は安い相部屋にしかとまれない。ここで彼は同室のロビンソン（アイルランド人），ドラマルシュ（フランス人）の二人連れと識りあいになる。この二人の浮浪者との関係は，カールがホテル・オクシデンタルでの職をみつける糸口を提供し，また後には彼にその職を失わせるきっかけともなるのである。

この二人のあぶれ者たちは，「きみの服は立派すぎて，見習工のような職をみつけるさまたげにもなりかねない」[14]などという奇怪なロジックで，カールに服を売り払わせ，彼をいいカモにする。カールが食料の調達に行く先がホテル・オクシデンタルである。ここで同郷の婦人グレーテ・ミッツェルバッハと知りあい，彼女の世話でホテルのエレベーター・ボーイの職をえて，二人のならず者と袂をわかつ。

事件はカールがこのホテルにも少しは慣れた頃，およそ二ケ月後に起る。カールに金づるとしての味をしめたドラマルシュは陰謀をめぐらして，カールと組んで仕事をしている（エレベーター・ボーイは十二時間勤務，一日二交代制）レネルをだきこんで，彼から情報を提供してもらう。このような下工作のあとでドラマルシュは、相棒のロビンソンをカールのところに遣わすのである。もちろんカールはそんな陰謀のことなど知るわけがない。

ロビンソンはカールの勤務中にしたたか酔って現われる。ブルネルダという女流歌手を新しい金づるにしたので，再び仲間に加わらないか，という勧誘が表むきの接近理由だが，察するところ金廻りはあまりよくないらしく，勧誘に失敗したらせめて金をせびろうという腹らしい。カールは気が気ではない。たとえ自分が呼びこんだのではないにせよ，こんな浮浪者とつきあいのあること

が発覚すれば首になりかねない。そのうちロビンソンは悪酔いして吐いてしまう。ところでエレベーター・ボーイは勤務中，許可をえないで持場を離れてはいけないことになっている。だからカールは，ロビンソンを片づけるのに一番時間のかからない方法を選んでしまう。つまりエレベーター・ボーイの共同寝室に彼をつれていって寝かせつける。この間わずか二分間のことである。この間に折悪しくこのホテルにとって最も大切な客のひとりが，カールのエレベーターの前で動くのを待っていたのだった。当然フロントへ連絡がとどき，カールはボーイ長の尋問を受ける。

カールは事前に許可をえようにも，まさかロビンソンを理由に挙げることはできなかったろう。しかも彼はとなりのエレベーター・ボーイに，自分のかわりを勤めてくれるようにたのんでおいたのだった。なぜなら彼はその夜その少年のために二時間もかわりをしてやっていたのだから，それ位は当然すぎるほどだったのだ。しかし尋問ではこんな言い訳は通らない。カールは即刻解雇される。それだけで済めばまだよかった。共同寝室にねかせておいたロビンソンが，「カールからお金をもらう約束だった」とさわいでいるという情報が尋問の現場にとどいたのである。そこでカールは，どの金を与えるつもりだったかを問われることになる。カールは正直に客からのチップを与えるつもりだったと答えて，手のひらにのせてみせる。しかしこれがボーイ長の疑惑をさらにつのらせることになる。

≪最初おまえはお金をとりに行くつもりはなく，おまえの今日のチップをやるつもりだった。だがおまえはこのお金をまだ所持していることが解った。だからおまえは別の金をとってくるつもりだったことは明らかだ。おまえが長い間持場を離れていたこともそれを傍証している。≫[15]

こう疑われると成程申し開きはむつかしい。カールも動転しているので，ロビンソンにお金を渡そうとした時，彼が気分が悪くて吐きそうだといい始め，そのままチップのことは忘れてしまったことを忘れている。疑ってかかる相手には何を言っても疑惑を固める種をまく結果にしかならないのに気づいたカールは，遂に，「善意のないところでは，自己弁明は不可能だ」[16] とつぶやいて，口をとざしてしまう。がこの沈黙でさえ自分の罪のいいぬけに窮したのだと誤解されてしまうのである。

≪彼は自分がなにを言おうとも，あとになってみると，自分が言おうとしたこととは全く別ものになってしまい，そこに善をみることも悪をみることも判断の仕方ひとつに委ねられていることを知った≫[17]

結局カールは泥棒の汚名をきせられて解雇される。幸いにグレーテのとりなしで，警察につきだされることだけは免れるものの，汚名をきせられた上に，恩にまできせられて追放されるのである。

さてここでも，父や伯父による追放の場合と同様に，罪とは呼べない微罪に対して法外な罰が下るという図式は変わらない。カールに落度が全くないわけではないが，その落度は多くの偶然がかさなって拡大された結果そうみえる程には大きくない。ましてや疑惑の歪んだ顕微鏡にかけられた時，巨大に膨れあがってみえる罪の姿は，もとのバクテリアほどの過失の小ささとは似ても似つかぬものになってしまっている。二分間持場を離れただけなのに，いつのまにか泥棒にまで仕立てあげられているのだから。

★　★　★　★

我々はカールに加えられる三度の追放に一貫しているのは，微罪に加えられる法外な罰という法則であることを確認した。ひとを繰り返しおそうものを宿命と呼んでいいなら，『アメリカ』はカールの宿命のリズムで構成されている作品である。さらにこの罪と罰との不均衡をもう一歩極端化するならば「何も悪いことをしなかった」のに逮捕され処刑されるヨーゼフ・K．の像をうることができる。一の罪に対して九の罰の下る世界から，零の罪に対して十の罰の下る世界へは，わずか一歩のへだたりしかない。この背後には多分次のようなカフカの想念が潜んでいるはずだ。

≪我々が現にいる状態が，罪過（Schuld）とは無関係に，罪深い（sündig）のである。≫[18] だからカールのわずかな罪過も，罪深い状態にある世界によって，過大な罰によって報いられ，逆に罪過のないヨーゼフ・K．も，そのままに罪深い世界の一部なのである。ここで『アメリカ』と『審判』の同一性は，そのまま差異性に転化する。そしてこの転化の鍵は，両作品の主人公の設定の仕方にかかっており，設定の仕方はカフカの階級観，或いは階級的背罪感と深くかかわっている。

これから『審判』の分析にはいってゆかねばならないのだが，しかも本稿でそれを果すつもりであったのだが，『アメリカ』における「罪と罰との不均衡」という命題に予想以上の手間と暇をかけてしまったので，次稿にのばさざるを

えない。カールの僅かな過失が，どんな状況の力学の必然によって，途方もない罰として結果するかを説明するために，自己嫌悪をかみながらも，ストーリーに深入りせざるをえなかった。独立した一篇の論文としては，存在を主張するに足りないが，連載の論理的な中継点，捨て石としてなら必要性を認められよう。　　（この項未了）

文献と略号（直接引用したもののみ）

Kafkas Werke (Gesamtausgade, S. Fischer Verlag, Hrsg, von Max Brod)

A. = Amerika (Roman)

P. = Prozeβ (Roman)

H. = Hochzeitsvorbereitungen anf dem Lande

注

1) A. 36
2) A. 36
3) アベ・プレヴォー：『マノン・レスコー』（新潮文庫）　青柳瑞穂訳　p. 211
4) Johannes Urzidil：〝Da geht Kafka〟 S. 23 (Artemis Verlag 1965)
5) A. 35
6) A. 38
7) P. 9
8) A. 60
9) A. 49～50
10) 『フランクリン自伝』（岩波文庫）p. 11　松本慎一・西川正身訳
11) 同上　p. 153
12) A. 107
13) 『プルースト文芸評論集』（筑摩叢書244）　鈴木道彦訳　p. 65
14) A. 119
15) A. 212
16) A. 213
17) A. 213
18) H. 101